

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26760024

研究課題名(和文) 聖地巡礼の商品化をめぐるコンフリクトと融和のための観光学

研究課題名(英文) An ethnographic study on the conflict between tourism and religion at a commercialized sacred place

研究代表者

門田 岳久 (KADOTA, Takehisa)

立教大学・観光学部・准教授

研究者番号：90633529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は現代社会において聖地が開発現象の文脈で再編成されるプロセスと派生的諸問題について、民族誌的なアプローチによって考察したものである。世界遺産にも登録された沖縄県南部の聖地を中心としたフィールドワークを通じ、宗教的な空間が観光地となり、訪問者が質量ともに増加する状況を背景に、以下の3点を明らかにした。(1)観光客増加に伴い聖域の保護が喫緊の課題となり、それに対応する形で宗教/観光を一元管理する仕組みが体系化されたこと、(2)管理体系化は文化遺産を社会に開放していく公共性の理念と必ずしも両立しないこと、(3)聖地の公共的管理においては既存の宗教伝統と融和的な関係を持つ必要性があることである。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed the recent change and problems of sacred places which were reformed in the context of local development in contemporary society by ethnographic approach. I did a field research at a traditional sacred place in the southern part of Okinawa that was also listed as a UNESCO's World Heritage Site, through which I recognized that the place became a touristic destination. The following three points were clarified. Firstly, as the number of tourists increased, the place became devastated, and a mechanism for managing religion/tourism was generated. Secondly, The systematic management of the sacred place is not necessarily compatible with the idea of "public heritage" that opens the sacred place as a cultural heritage to the society widely. Thirdly, what is necessary for the public management of the sacred place is to have a conciliatory relationship with the local religious tradition.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：住民参加型開発 公共遺産 スピリチュアリティ 空間 沖縄 御嶽

1. 研究開始当初の背景

観光の多様化に伴い、世界各地で伝統的な聖地が観光地として「再発見」される事態が生じている。加えて巡礼や宗教経験を一種の観光資源として商品化するような新たな動きも見られる。しかし宗教とツーリズムの相補性が高まるにつれ、コンフリクトもまた増加・複雑化している。例えば聖地の保全と観光地開発の相克、伝統宗教を担う人々の価値観と現代の観光客の価値観の対立などであり、この状況は世界遺産に宗教的空間が取り込まれるようになったことで一層加速するだけでなく、聖地や宗教組織の側が能動的に観光開発に取り組んだり、訪問者の側にも新たな宗教観を持った巡礼者の観光客が増加したりと、単純に「資源化する主体としての観光」と「資源化される客体としての宗教」と二項対立で議論できないような錯綜した状況にある。既存の研究では、観光開発の側に立つ観光産業研究と、信仰や地域的文脈で議論してきた宗教学、人類学、民俗学などの研究とで懸隔が大きく、宗教とツーリズムが混濁する複雑な状況に対し有効な分析枠組みを持たなかった。

2. 研究の目的

これに対し本研究は、沖縄本島南部の聖地を主要フィールドに、現場での実地調査に基づいて宗教とツーリズムの混淆やコンフリクトの複雑さを民族誌的に理解し、その融和に向けた観光的理解枠組を構築することを目的とした。具体的には、(1)伝統的な聖地の観光化に伴うトラブルや利害の実相、その解決策に関する事例収集を行う。(2)聖地の観光化に携わる各主体の相関関係と、観光と宗教との両立という課題に対する政策的スタンスを明らかにする。(3)聖地の現場管理者の日常実践の観察・記録により、既存の宗教的要素がどのように取り込まれているか把握する。(4)関係主体の多様な声を反映した聖地の開発と保存を両立するための枠組を導き出すことである。

3. 研究の方法

研究目的を達するために、本研究では、沖縄県南城市に位置する「斎場御嶽」および近隣の久高島での文化人類学的フィールドワークと、比較対象とする他地域での小規模な現地調査を行いつつ、下記に示す分野の文献調査を行うことで、その結果を接合した形の成果発表を行った。南城市において研究代表者は2007年以来フィールドワークを実施しており、「斎場御嶽」の世界遺産リスト記載(2000年)に伴う宗教儀礼の変容に関して聞き取りや文献調査を行ってきた。本研究ではその際の知見やネットワークを引き継ぎつつ、助成期間中、同地にて下記日程で調査を行った。

- 2014年6月28日～7月8日

- 2015年3月15日～3月25日
- 2015年3月28日～3月31日
- 2015年6月28日～7月6日
- 2015年9月5日～9月17日
- 2016年3月14日～3月20日
- 2016年3月23日～3月27日
- 2016年6月25日～7月3日
- 2016年9月5日～9月12日
- 2017年3月16日～3月23日

いずれも手法は、文化人類学・民俗学をベースとした民族誌的手法である。具体的には、聖地を管理する地元ボランティアや住民組織、文化・観光行政の活動に関するインタビューを行うだけでなく、その活動に参加することで、聖地管理の手法と宗教的事象の扱いについて把握した。また都市部からの観光客や参拝者など聖地を訪問する人々にインタビュー調査を行い、観光経験のあり方を類型化することで、他の一般的な観光と聖地観光との質的な相違を見出すことを目指した。

文献研究としては、(1)聖地や世界遺産の表象と観光客への影響を考えるために旅行雑誌やライフスタイル誌における聖地の宗教性の表記を分析しつつ、(2)観光的文脈で再構成される聖地の宗教性と沖縄伝統の信仰のあり方との異同を、民俗学・宗教学等の沖縄地域研究の先行研究から析出することで、場所の表象の変遷を把握する作業を行った。(3)理論的な枠組を整えるため、観光開発と信仰保護のコンフリクト融和に関し、公共哲学や自治論における社会的合意形成論、環境社会学や民俗学におけるコモンズ論および総有論に関する文献研究を行い、観光資源や文化遺産の自主管理への応用可能性を探った。こうした理論的検討と並行し、南城市においてボランティアや行政を含めた聖地管理に関わるタウンミーティングに参加し、理論の応用可能性を図った。(4)加えて聖域内の空間管理に関する分析視覚を得るため、近年研究蓄積の著しい宗教空間に関する建築史的研究、地理学的手法に基づく観光空間の管理技法に関する研究等を渉猟した。それにより、公共性を維持しつつ開いていく空間において、同時に宗教性が保たれるための制度的特性とはいかなるものであるのかを把握することに努めた。

4. 研究成果

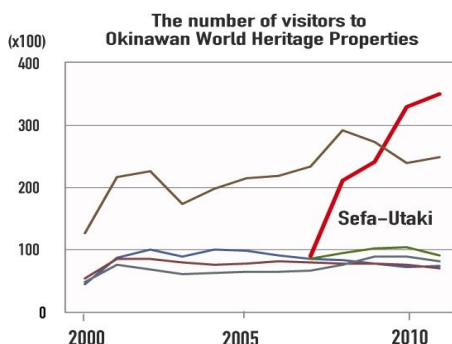
以上の研究成果は代表者の関わる民俗学・人類学・宗教学および宗教社会学・観光学といった分野で学会口頭報告、学術論文執筆を行った。強いて一分野に限定せず、研究代表者の関わる分野で広く公開した理由は、聖地の観光地化、もしくは宗教とツーリズムの関係という主題自体がもとより多角的な関心を呼ぶ学際的な性格を有しているためであり、一分野に限って成果公開への応答を受けるよりも、多様な批判・批評を仰ぐこと

が本研究の整理と次なる展開に向けて有意義だと判断したためである。その中で特徴的だと思われる反応を若干挙げるならば、観光研究（観光学）の分野では造園学、建築学、社会工学といった「計画論」分野の専門家から、宗教（信仰、儀礼、民俗）の論理や慣習が現代のツーリズムや文化遺産制度に多大な影響を及ぼしていることに強い関心を持ったという反応が多く得られた。また民俗学や宗教学の専門家からは、伝統的な「聖」が商品化されている事実に対して驚嘆とともに、それを分析する枠組が不十分であったことに関し、自己批判とも言える反応を得ることがあった。以上の、ある意味で対称的な反応は、文化・宗教をめぐる観光現象という主題が潜在的に有している分野横断的な性格に比して、実際の議論がこれまでいかに蛸壺化し、学際的議論が停滞していたかを示しており、とりわけ計画系の分野と人文系の分野との没交渉が照射される結果となった。

以上のような研究成果公開の機会において、明らかとなったのは主に以下の3点に集約できる。

（1）観光化に伴う聖地の「マナー問題」

斎場御嶽および久高島では世界遺産登録や「パワースポット」と呼ばれるツーリズム商品へのカテゴリ化により、訪問者が近年急増し、聖地の「荒廃」が指摘されるようになってきている。フィールドワークを通じ、観光客の増加に伴う環境変化やそれに対する管理者側の対応状況について調査した。特に質的調査の手法に基づいて現場での聖地保護にまつわる「トラブル」「マナー問題」を具体的な事例によって把握するヒアリング調査に重点を置いた。訪問者（巡礼者、観光客）にヒアリング調査を実施することで、聖地を訪れる動機やきっかけとなったメディア体験を探るとともに、観光地イメージを生み出すメディアにおける、聖地表象の変遷を調査した。



図の通り、斎場御嶽は9つある沖縄の世界遺産の中でも訪問者が急増しており、その結果、雑誌等で取り上げられる機会も増えている。そこでは多くの場合「聖地」「パワースポット」と表現され、沖縄在来の御嶽信仰や祖先祭祀といった斎場御嶽に深く関係している事象を省いた、一般化された「聖地」像

に当てはめられている。こうしたイメージを元に訪れる観光客の中には、聖域内の造形物や儀礼への理解が乏しい人も多く、聖域内でルートを外れたり静謐な雰囲気や乱したりすることに結びついている。トラブルの多くは場所の聖性を知識として共有されていないことに端を発することから、管理者側では歴史や由緒を観光客に「教育」する施設や機会を増やそうとしている。こうした状況把握をもとに、聖地の管理体制強化が訪問者における「マナー問題」の発生と同時進行であることが明らかとなった。

（2）聖地の管理と「コミュニティ」変容

急増する観光客への対応や、聖地の「保存と活用」の併存状況について、制度面および現場の管理面に関して参与観察や聞き取り調査を行い、聖地管理におけるコミュニティの役割の変化を、公共遺産論と呼ばれる近年のヘリテージスタディーズを参考に分析した。斎場御嶽周辺では世界遺産登録前後よりボランティア団体によるガイド活動が開始され、現在では遺産の管理主体である行政や観光協会などと連携しながら、現場での聖地管理にあたっている。他方で一般の近隣住民は関与の機会が減っており、特に琉球王国崩壊後に御嶽の祭祀面を司ってきた家系は、草刈りや日常的な管理面でも足が遠のいていることが聞き取りから明らかとなった。それ以外の住民は年中行事の際に立ち入ることはあっても、総じて距離を感じるようになってきている。

その背景には前述の通り、観光客増加に伴う「マナー問題」の発生と、それと同時に進んだ管理組織の体系化がある。管理組織はボランティア団体や観光協会による、精緻化された管理の方法によって、聖域内はなんとか宗教環境が維持され、拝み（住民による儀礼や信仰活動）が保たれてはいるものの、有料化や時間の管理によって入域のハードルが上がっている。行政はこれに対して、信仰活動の人々への入場配慮を行うなど、信仰と開発という二項対立の融和を図ろうとしているが、UNESCOやヘリテージスタディーズが理想とする、コミュニティを基盤とした公共遺産管理には途上である。以上のような調査・分析を通じ、観光化に伴って聖地がより地域に開かれていく側面と、逆に閉じられていく側面の同時並行が進んでいることが明らかとなった。

観光地化される聖地のコンフリクト解消には、地域的文脈や、宗教学的には「宗教伝統」と言われる歴史性を活かした管理の仕組みを策定することが不可欠であるという結論に至った。従来も住民参加型開発と呼ばれる手法を通じ、地域住民の参加が謳われてきたが、そこでは「主体的」に関与する住民のみが焦点化され、開発の枠組に入らない住民の意思や考えは等閑視されてきた。本研究では「住民」の多様性に配慮した枠組み構築が求

められるとともに、聖地の観光化や管理に敷衍すれば、公共セクターや観光協会などの世俗組織にとって、管理組織に関わっていない住民の宗教観や習俗といった「民俗知」の学習が不可欠になるということが明らかとなった。

(3) 信仰と観光行動との境界線の相対化

聖地の観光化により、訪問者の多様化が明らかとなった。従来からの参詣者・民間宗教者以外で言えば増加したのはいわゆる「観光客」であり、前述した聖域内における「トラブル」の主体もまたここにあるが、現場での調査で明らかとなったのは、観光客とも参詣者とも分類しがたい新たなカテゴリーの人々である。宗教研究の文脈では「スピリチュアリティ」への傾向を持つと表現しうる第三のタイプの訪問者の増加であり、その特徴として、自らを観光客ではないと自己規定する点にある。かといってこの人々は、聖地にまつわる伝統的な宗教性・知識・作法を共有しているわけでもなく、斎場御嶽の固有な歴史、儀礼に関する知識欲求も高いわけではない。

「スピリチュアリティ」に興味を抱く人々は、一般に日本において2000年～2010年頃のメディアを介した「スピリチュアルブーム」で増加したと言われている。旅の中では「ヒーリング」「パワー」の埋め込まれた(とされる)場所に出向くことを好む点で、スピリチュアリティとツーリズムの融合した形態を示している。この人々はいわゆる観光客と異なり、聖域の環境に配慮をし、「マナー問題」としてあげつられる行為を極力避ける傾向にあるため、現場では「問題」として認識されることはない。むしろ真摯な祈りを捧げる点で、伝統的な宗教者にも比する態度を示す。他方でその祈り方やベースとなっている知識は、沖縄民間信仰のそれと異なり、メディアを経由した独自の宗教観に基づくものであるため、ボランティア団体等の現場管理者はどのように対応すべきなのか戸惑いを感じているのも事実である。

こうした未成のカテゴリーの台頭に関する状況は、欧州の宗教社会学でも指摘されている。商業的なスピリチュアリティによる伝統的聖地の再解釈現象が日本でも生じていることが見いだせる。この点を観光学に敷衍するならば、スピリチュアルな傾向を持った参詣者の増加は、聖地を訪れる観光客の質的多様化と指摘し得るだろう。つまり、地域の伝統的な文脈を共有した参詣者・巡礼者が増加しているのではなく、その文脈を共有せず、メディアにおいて形成された聖地の「イメージ」に接触しようとする宗教的志向の強い観光客の誕生である。言い換えるならば、宗教とツーリズムの境界線が近代観光研究が捉えてきたように「信仰」と「娯楽」として二分化できるのではなく、その境界線が曖昧になりつつあるということである。

観光学は宗教性や聖地に関するこのような民族誌的知見に未だ乏しく、拡大しつつある観光空間の新たな見方を構築することは急務である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1. 門田岳久、聖地と儀礼の「消費」：沖縄・斎場御嶽をめぐる宗教／ツーリズムの現代民俗学的研究、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第205集、2017、255-290
2. 門田岳久、「離島性」の克服：宮本常一と反転する開発思想、立教大学観光学部紀要、査読無、第19号、2017、23-37
3. 門田岳久、聖地観光の空間的構築 沖縄斎場御嶽の管理技法と「聖地らしさ」の生成をめぐる、観光学評論、査読無、4巻2号、2016、161-175

[学会発表](計18件)

1. 門田岳久、聖地／巡礼地経営における擬似的宗教組織：日本の二つの事例比較、南山大学人類学研究所主催・公開シンポジウム『宗教組織の経営』についての文化人類学的研究、2016年12月3日、南山大学(愛知県名古屋市)
2. Takehisa Kadota, Spiritual Tourists and Secular Pilgrims: An intersection of Religion and Tourism in a World Heritage Site in Japan, ドイツ民俗学会・日本民俗学会国際シンポジウム“Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany”, 2016年10月28日、ミュンヘン大学、ミュンヘン(ドイツ)
3. 門田岳久、沖縄・斎場御嶽をめぐる開発思想と住民参加、日本文化人類学会第50回研究大会(分科会「黒船としての文化遺産」)、2016年5月28日、南山大学(愛知県名古屋市)
4. 門田岳久、宮本常一の観光文化論と「回収」のロジック、日本生活学会第43回総会・公開シンポジウム、2016年5月21日、立教大学(埼玉県新座市)
5. 門田岳久、公共聖地論 沖縄南部聖域における空間管理の技術と秩序生成をめぐる、観光学術学会第3回研究集会、2016年2月20日、法政大学(東京都千代田区)
6. 門田岳久、地域開発と宗教的なもの の発見 沖縄本島南部の聖域化／観光化をめぐる、北海道大学「拡張現実の時代における〈場所〉と〈他者〉に関する領域横断的研究」講演会、2015年11月19日、北海道大学(北海道札幌市)
7. 門田岳久、「聖」を保全する 沖縄・斎場御嶽の観光化と聖域管理の相克、国立

民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学 グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」成果公開フォーラム、2014年11月8日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）

8. 門田岳久、200 円の聖地 観光化に伴う斎場御嶽の入場管理と公共性、日本宗教学会第 73 回学術大会、2014 年 9 月 14 日、同志社大学（京都府京都市）

〔図書〕(計 4 件)

1. 門田岳久他、亜紀書房、東アジア観光学：まなざし・場所・集団、2017、320(127-160)
2. 門田岳久他、南山大学人類学研究所公開シンポジウム講演録「『宗教組織の経営』についての文化人類学的研究」、2017、103(59-73)
3. 門田岳久他、古今書院、フィールドに入る、2014、242(137-157)
4. 門田岳久他、森話社、人 に向きあう民俗学、2014、267(8-39, 226-259)

〔その他〕

ホームページ等

<https://researchmap.jp/kadota/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

門田 岳久 (KADOTA, Takehisa)

立教大学・観光学部・准教授

研究者番号：90633529